

● 16 板倉弘幸

(内容「ランダム第一巻」「ランダム第二巻」)

「ランダム」は、向山洋一氏が36、7歳のときに書かれたものである。この巻に登場する子どもたちは、向山氏にとって調布大塚小時代での最後の卒業生であった。

また、この当時の氏は、次のような三つの仕事を精力的にこなしている。

- ① 東京都教育研究員（教育課題）
- ② 全国教研東京代表（体育）
- ③ 調布大塚小学校公開発表（社会科）

本巻は、この多忙な中で書かれた学級通信である。主なものをとりあげてみる。

- (1) 調布大塚小に赴任して初めて持った教え子が「中学生文学賞」を受賞した。
- (2) 「ふるさとの木の葉の駅」の授業をする。
- (3) 卒業单元の計画を作成させる。
- (4) 新潟の飯沼宏校長、大森修氏ら新潟大附属小グループの人たちとの出会い。

私の記憶では、このころから全国の多くの人々が、向山氏の授業参観を希望するようになってきたと思う。

私自身、「ふるさとの木の葉の駅」や、「暗夜行路」の授業、また新潟附属小グループとの出会いに参加していた。とくに「ふるさと」の授業参観は、今も鮮明に覚えている。「視点の移動」についての子どもたちの活発な討論、最後の一行「わたしは 息をのんできていた」の一字あきの検討など、私も子どもと同じになって考えていたことを思い出す。

あの授業の組み立てには、たしかに無理があった。4～5時間かけて、詳しく授業できる内容を1時間の組み立てで授業してしまったからである。

向山氏も急ぐあまりに時間を気にしているのが、私の目にもよくわかった。それでもなおかつ、あの授業構成はすばらしかった。と私は思っている。

もう一つ、思い出の通信があった。私が一人で向山学級を参観しにいったときのことだ。1時間算数の授業をさせていただく。私の学級ではすでに授業したところだったので、そのときのつまづきをもとにして、授業してみた。この通信にはおほめの言葉があるが、そのときはなかった。実際は途中で向山氏と交代をしたのである。私が子どもの意見に対応できなくなってしまったからである。また、もう一つ氏から言われたことがある。

「板倉君は表情がない。もっと表情に変化をつけよ。」と。

いまだに、これが私の課題である。